

---

# R e a l i z e   N e t w o r k

葉月秋人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Realize Network

### 【Zコード】

Z5674D

### 【作者名】

葉月秋人

### 【あらすじ】

一つの風景に、少女と少年が佇んでいた。少女は問う。「この世界は気に入った?」薄暗い部屋に、明るく灯ったモニター。向かい合って、一人の男が座っている。彼には疑問があった。この世界は本当なのか?風の吹き抜けるビルの屋上。眼下には、林立するビル群と車の流れ。彼に、恐怖はなかった。

## 序章1 その先の風景

そこは風に葉が舞つていて、陽光に照らし出された景色が、鮮烈な印象を持っている。

そこに一人の少女。間を置いて少年が立っている。肌に程よい風を感じる。

「ここの世界は気に入った？」

少女がそう言うと、少し下を向き少年が応える。

「何て言つたか、色々ありすぎて、取り留めのない世界だね」

「そう。なら、この場所は気に入った？」

軽く手を閉じ、少女が言つ。

「そう。。悪くない。」

「。。じゃあ」

。

室内は薄暗く、家具や机やベッドがぼんやりと浮かび上がっている。

一箇所だけ明るいディスプレイ。そこに座る男が一人。

黙つてカチ、カチ、とマウスをクリックする音だけが響いている。

この世界は本当なのか、今の自分は本当の自分なのか。彼には疑問があつた。

その静止画の意味を感じ取りながら、何処かぼんやりとした意識で

イスに腰掛けている。

そうしながらも、世界に対する疑問が頭に引っかかっている。

日々歩く日常も、街並みも、その風景も、どこか本物でないような気がして。。

歩んできた人生の体験も、確かに存在して、世界を感じてきたはず。なのにどうしてか、信じきることができない。

この世界はもしかしたら、本物ではないのではないか?

何故かで信じることができずに、淡々と日常を過ごしてきた。

家族と過ごしていても、友達と居ても、街中を歩いていたとしても、何処か体験が、一步引いたところから見た世界のようで。。

風を感じる。少し強めの風。視界には、眼下に広がる道路や、林立する建物。

遠く、上方から眺めた風景。

恐怖はなかった。

落下しても、その先に別の世界が待っているような気がしたから。

そう、それを僕は、知っていたのだろうか?

肌に風を感じ、自然と目を閉じる。フッと力が抜け、その場に倒れこむように体が傾むいていく。

そう、とても自然に。。。

気づくとビル群を見上げていた。

だがそれは、記憶にある落する前の景色とは違い、それは廃墟だった。

足元から光が舞い、ボンヤリとした青い光が、ゆっくり回りながら上っていく。

空が薄暗く曇り、少年はそれ見上げている。

その先に、何があるのか、知っているかのようだ。

## 序章2 時時もの景色

「セヒ、セヒ」

母親の呼ぶ声がする。

部屋が暗いところは分かっていた。

雨戸は閉めてないから、室内が暗いなら夜だ。

11時には寝たから、今は深夜の筈。

名前を呼ばれて起きたが、そこに、母親の姿はなかった。

・・幻聴。 それとも夢の中の声だったのか。

「セヒー。」

大きく呼ばれて、ハツと気づいた。

母親が腰に手を当て、仁王立ちしている。

ああ。

どうやら夢想の世界に浸っていたらしい。

余りに入り込み過ぎていて、その世界をリアルに感じていた。

・じゃあ、その世界は現実なの?

一瞬脳裏を言葉がよぎる。

・・今のは?

「せとし、起きてるの？」

「・・え？」

「もひすぐ夕食だから、準備手伝って」

「あ、ああ・・ 分かった」

母親が去る。

・じゃあ、その世界は現実なの？

ふと過ぎつた、その言葉を思い出す。

窓から茜色の光が差し込んでいる。

時刻は夕刻。

胡坐をかいたまま、窓の向こう風景を眺めていた。

・・・ん なんだっけ。夕飯の支度の手伝いだっけ。

その独特の世界感に何処か惹かれつつも、ベッドから腰を浮かせた。

何かが違う。

いつもの景色。

母親が夕飯の支度をし、室内はオレンジ。

何時も見てきた、といつ認識があるので、何処かで違う、と感じている。

あれ。俺、いつも、ここに、居たつけ・・?  
そんな考えが、ふと掠めてしまつ。

・・・

台所に立つ母親の姿を眺める。

いつのも景色・・景色・・・景色・・・・。  
そう、これが何時もの光景だ。  
だが、何かが、違うような気がして。  
何が違うのか、何か決定的な違いがある気がして、それが何なのか  
分からぬ。

「散歩行つてくる」

そう言い放ち外に出ると、いつも、の路を歩み始める。

そこから見える藍色がかつた空、壁に囲まれた道路、その先で下る  
路の先に広がる街並。

その先の海。

いつのままだ。

でも、何故だらつ・・。

僕は、こことは違う何処かに居た。

その風景を思い出すとしても、思い出せないけど。

確かに、その場所に居たような気がするのだ。

「うわ〜」  
綺麗で。なのに、そこが、とても懐かしくて。  
。

僕は・・

## Realize Network 1 (1)

「ハヤトーー」

「ん・・・」

「見つけたー」

「風華か。

道路からこちらへ駆け寄りながら、

「ここにいたのかー」と少女は言ひ。

彼の目の前まで来ると、

「また海かー」

海の方を見やりながら風華が言ひ。

「そう。また海。」

海の向いの、遠い空を眺めながら答える。

「・・・・・」

「・・・・・」

「なんか、海を見ると、その遠い先に、何処か別の世界が広が

つてゐるような気がして。」

「・・そりゃそーだろ。」

「つこつ意味じゃないんだけどな。」

少女が横に、よつと腰掛ける。

「今日さー、何かする？」

と少女が聞いてくる。

それは、彼女のよくある問い合わせだった。

この少女との付き合いは、そう長くもない。

同じ高校、同学年だが、この少女とはネットの中で会つことの方が多かった。

速人が一人ブラブラしているときは、連絡機能付きの機器類を持ち歩かない場合が多く、  
そんなとき、風華は、彼のよく行きそうな場所にこうしてやつてくれるのだ。

「面白いのあるんだけどー」

「ん、ネット?」

「うん。今夜辺り、行かない?」

「いいよ。」

風華が面白いの、と言った時、それが外れた試しは殆どない。

「じゃー、あとで連絡いれてねー?」

「夜にね。」

「うー。」

「んじゃねー」

乾いた流木から立ち上ると、少女はどんづくと向かって小走りに駆けて行つた。

その姿を見送ると、また遠く空に目を戻し、そして、瞳を閉じた。涙の音を、心に感じながら。

彼は高層住宅の上から数えた方が早い辺りに、一人で住んでいた。部屋は広すぎるのもなく、狭いと感じることもなく、防犯上一応は閉めた方がいいのだろうが、窓は何時も開け放つており、部屋に入ると、流れ込む空気が、優しく肌を撫でた。

夕暮れ前の、弱りかけた日差し。

それが、元々デザインも悪くない室内を、それなりにいい感じに照らし出していた。

彼が帰ると、帰宅を感知したコンピュータが一連の設定に基いて、ライトが点灯させ、スリープモードだったコンピュータがONになり、「ヒーメーカー」が作動し、ついでに風呂まで沸かし始めた。

ダイブ機能付きのイスに腰掛けると、メインモニタがアクティブ化する。

サブモニタが開かれ、「おかえりなさい」と擬似人格プログラムの彩

香が彼を迎える。

「風華さんから、メールが届いてますよ。」

「ちょっとしたメッセージとか、簡単に済ませたい場合は、未だにメールなどを用いることが多いった。」

「多分、今夜のことだろ。開いて」

サブモニタが開かれ、そこにメッセージ表示される。

「こんちわー。夜、行く場所だけビ、ここにサイトに簡単な説明載つてるから見といてー

ファイルはこいつから転送しどくからー。じゃー夜、そこで会いましょー

ではねー

風華

「ファイル転送しますか?」

「うん、やつといて。風呂入つてくるから。転送終わつたら、有効化しといて」

・・・・・

気が付くと、小音量で柔らかな音楽が流れていた。

街の明かりが窓から差し込んでいたため、目を開いても真っ暗ということはなかった。

風呂に入つて汗を流した後、軽く夕食を摂つて眠つていた。

「悪くない目覚めだね」

「それは、よかったです」

時計を見ると、7時28分を示していた。

「ん・・そろそろ風華に連絡するか」

「風華さんには繋ぎますか？」

「うん。繋いで」

サブモニタがアクティブ化する。

「音声通話です」

「おっ? ハヤト? やつはー。準備できてるー?」

「綾香さん、準備できてるかな?」

「有効化は完了しています。 風華さんのアカウントがあれば、友達招待モードで、体験的プレイが可能です」

「だつてさ、大丈夫?」

「うん。プレイシナリオはいつで選択するか、要請来たり、受諾してくれればおつはー」

「了解。じゃ行くか。」

・・・

序章3 何時もの場所

何処か遠くから、意識が戻つてくるのを感じた。ここが現在、いつもの場所だということが分かる。

ふと目を開く。

薄暗い室内。主人の覚醒を感知したコンピュータが、照明を点灯させる。

照らし出された室内はいつも通りで、自分がかけていた背もたれから軽く横に顔を向けると、

螺旋状に舞い上がる青い光のオブジェが見える。

ゆつたり上って行くそれを見ていると、どこか心が落ち着く気がする。

長くて、リアルな夢を見続けていたような気分だった。

段々と、静かだった精神が、暖かく活動を開始し、それに伴つて体が温かくなつていく感じがする。

落ち着いた体を動かし、空間投影されたモニターにサッと指を走らせる。

薄暗くなつた外の景色を透過する窓が開かれ、レースのカーテンがやさしく吹き上がる。

その風を感じながら、ゆつくりと目を閉じる。

夢見た後の様な、その余韻に浸りながら。

## 序章4 旅立ち

「さとし、さとしー」「そう呼ばれて気づいた。

そう、目覚めたときは、そこが夢想の世界なのか、現実の世界なのか区別がつかない状態で、

ただ薄暗い場所だな、という印象だけがとても強かった。

ここは・・?

そう思い、・母親・の方を見上げる。

そこには腕を腰に当て、暗くて分からぬ表情でこちらに立ちしている姿が見えた。

それは顔の黒い人間の姿をした化け物のようだ・・

「意識」がはつきりしていく。

それにしたがって、「自分」の置かれている状況に対する認識が「復活」する。

それがおそらく、思い出す、という作用なのだろうか。

そう、「こじが」、「僕」の居た場所。

「こじに居た。そう居ただろう。もう記憶が告げている。そう、居た。だが、つい今しがた、今とは違う場所にも居た。

「また夢の世界に行つてたの？」

「・・・」

・・夢、とは何だらう。正確にこれが夢、と分かる理由は何だらう。

夢、なのか。ただの夢想なのか。

いずれにせよ、僕は違う何処かに居た。

・・だが、それだからと書いて、それが何なのだろう。こじに居たにしろ、そこ、に居たにしろ、誰にも分からない。何処が僕の場所かなんて、誰にも分からない。そう、こじにしろ、あそこ、にしろ。そこが、何処であれ・・

それよりも、こじが自分の場所だといつ、押し付けがましい認識ほど迷惑なものもない。

「せとし・・・いい加減、目、覚ましなさい。」

「・・・ん？」

・・田を覚ます・・・？ 何処で・・・？

「・・・」

「はあ・・・？」

母親はその言葉にきょとんとした様子で立っている。顔は見えないが。

・・そんなことを聞いても仕方ないか。。

おもむろに立ち上がると、・・母親・の脇を通り。

「散歩に出てくる。」

ポカンとした様子の母親を、残したまま。

この街はなんだ・・・？

夕暮れ間近の町並みを見下ろす、学校の屋上より一層高くなつた出入り口の上に腰掛け、ゆつたり流れる風を感じながら、一人、思に耽る。

何故、僕はここに居るのだ？・・・？

正確には「この世界」といすべきか。

そう、「」とは違つ何処かがあると、何処か遠くで確信している。  
「」とは違つ、場所に行く方法、・・そう、僕はそれを一つしか知  
らない。

それは・・

風を感じている。

少し強めの不快でない風。

視界には、林立するビル群と、米粒になつた車の流れ。

そこから飛び降りたとして、どうなるものでもない。ただ、逝くだけ。そう、別にどうといつ」とではない。

それは分かつていた。

「僕」にはこの方法しかなかつたから。

肌に風を感じ、自然と目を閉じた。力がフツと抜け、その場に自然に倒れて行く。

そう、その先に何があるのか、確かめるために・・

八口

半透明の黒いチャットウインドウがアクティブ化する。

声と一緒に文字が出てくる。

何故音声通話でチャットウインドウがアクティブ化するのかは未だ不明だが、

「誰？」

「・・・・・ちょっと表でろう――?」

それまで周囲を取り囲んでいた景色が遠くなる。

「ハヤトさん・・音声通話です・・」

「あい」

「風華だよーーー?」

うん。  
そうだね。

「わが二てんのが二テあー？」

「ねえ、これってどんなゲームなの?」

「……うーん。つてスルーしてるしいー……。まあ、いいや。えっとね……」

「早い話、体感ゲームだよおー」

「やつてみよー。それが早い、うん。」

何か引っかかるものを感じたが、何時もの風華の感じだと、間違いとこりともないようと思えた。

「まあいいや。どうすればいい?」

「いやちで、シナリオに誘うからー、それに参加してくれればいいよー。」

「わかつた。じゅあ、向ひのうで。

卷之二十一

遠くなつていった景色が近づいて、周囲を取り囲む。・・それと同時に街並みにの雜踏や、鳥の鳴き声、風の葉擦れの音、肌に感じる空気の流れ、温度、様々な感覚がファーデバックし始める。

「九一〇」

「誰？」

「・・・・・」

「ちゅうとおーーー? 表でろおーーー?」

「いや、それはちゅういいから。笑」

「ほー」

ウイングが開き、風さんからシナリオ参加要請が届きました。参加しますか?

とのメッセージが表示される。

「OK、参加するよ。」

そつぱいじ、メッセージが受諾。に変わる。

それまで、周囲を取り囲んでいた風景が、フードアクトしながら遠くなっていく。

そして、僕は、ある世界で目覚めた。・

本編1（3）

その街並みは雪が降っていた。

古いヨーロッパの田舎の様な街並みに、空は曇り、夕暮れ時の暗い  
雰囲気を、街の明かり  
が、暖かい雰囲気に変えていた。

田を覚ますと、ベッドの上に横たわっていた。

室内は暗い色調で、本棚や机、暖炉にドア、どれも古めかしい具合  
で、暖炉の炎が、室内をやわらかく照らす照明になっていた。  
扉の曇りガラスの外も、余り明るい感じではなかつた。

起き上がると、その扉から表へ出る。

扉を開けると、濃い曇りガラスからは伺えないほど、空は曇りな  
に、明るさが感じられた。

その光源と一緒に、田に飛び込んで来たのは、古い街並みと風に舞  
い落ちる上空からの雪。

その光景に、ボヤケていた意識が目覚めたような気がした。

そして、体の違和感に気づく。

その風景も魅惑的だったが、それを確認するために視線を下へ落とす。

「・・・・」

なるほど、風華が具体的に語らなかつた理由はこれが。

・シナリオを体感するゲーム・・

そんな風に言つてこたよつて思つ。

「なるほどね」

「-」の体-は女の子、だつた。

少女役つて訳か。

「綾ちゃん、風華に繋いで。？」

「はい。繋ぎますね。」

古いヨーロッパの街並みに、半透明な水色の「ディスプレイ」が表示される。

「はーい、なに?」

「あのや、-」のシナリオつて、どんなの?」

「うーんとねー。それは、言えないかなあ。」

「・・まあ、いい。それじゃあ、風華はも、何の役?」

「へへへーっ それも秘密だよー。この街で出会った誰が私が、分からなこいつのも面白いでしょー」

「じゃあ。質問を変える。・・じひが何の役か、ってのは、やつらは分かってる?」

「ふふふ・・それは~。もちろん」

「・・まあ・・いい。」

「ふふふ それじゃ~、楽しむわ」

「・・まこと。」

そのままひしめき手をふんわりと上げた。

・・なるほどね。

工芸を貰ぐ。

「もーじだつたか・・」

空は相変わらず淀んでる。冷たい微風を感じつつ、これから始まるであろう「シナリオ」に思いを馳せた。

本編1（4）

雪降る街並み。古いヨーロッパ調の街並み、季節は冬。時折吹く風に雪が軽く吹雪く。

「いい感じの街並みだな。

その冷たい風を感じながら、シナリオが開始されるのを待っている。

半透明のウィンドウが開く。

「もうすぐ、シナリオが開始するようだ。」

綾香さんが、そう告げた。

「わかった。」「自分は、このまま待つてればいいのかな？」

「はい。・・時間がくれば始まるようなので、それまでは自由していて大丈夫みたいです。」

「了解。ありがと。」

「それでは、楽しんでくださいね。」

「はいよ。」

ウインドウが消える。

・・・・それにしても、この待ち時間は何に対するものなのだろう。

風華と自分以外に、参加者がいるのだろうか？

まあいい。あまり深く詮索するのではなく止めてしまおう。

「・・間もなく、シナリオを開始いたします。・・カウントダウ  
ンが、開始されます。」

そう告げるシステムメッセージが流れると、その街並みに、30・  
29・・とカウントダウンが表示され始める。

1 2 3 4 5  
· · · · ·

「シナリオを、開始いたします。」

そう告げるメッシュセージがアナウンスされると、視界が遠ざかり始める。

雪降る世界が、遠い彼方に、消えていく。

。そして、視界は暗くなり、意識が、遠くなつていくのを、感じた・。

## Realize Network 2 (1)

「イフヒリナ・・イフヒリナー？」

・・暗い視界の何処かで、誰かの呼ぶ声がする。

「この声・・お母さん・・？」

頭の片隅で、その可能性が示唆されたとき、今まで自分が、夢の世界にどっぷり浸かっていたことを認識した。

そう、私は、そこに居た。

その世界で暮らしているかのように感じていた。

それで、私がいた現実世界のことを、すっかり忘れていたんだ。

そう、少なくとも、そう呼ばれる世界を・・

意識が覚醒して行くのを感じる。どんどん現実感・・・現実に対する認識が復活していく。

そう、ここが私の居た世界・・そして、これからも居るであろう世界。

「イフヒリナ。」・・意識が覚醒する。

「・・・・」目を開く。

そのまま少し、ぼんやり天井を眺め、母親の方へ視線を向いた。

「「」飯できてるよ。」

そう微笑むと、母親は、戻つていいく。

長じ夢の中に居たせいだらうか? いつも見ていく筈の景色が、新鮮に感じる。

窓の外に見える、香氣な田舎の街並みと晴れた青空と雲。吹き込む風。

室内はいつも通り。それを確認するかのように、周囲を見まわしている。

「うん。私の場所。」

瞳を閉じ、そう、確かめるよ。。

ベッドから抜け出ると、パジャマ姿から着替えるため、クローゼットを開く。

「・・・・」

その内側の鏡に映つて いる自分の姿に、一瞬静止する。

「・・・?」

あれ? . . 私、こいつの顔だったかな。 . ?

長い、夢の中に居たせいだらうか。

見慣れている自分の姿にさえ、どこか違和感のようないいものを見えた。

・・・すぐ、いつもの自分に戻るよね。。

着替えを再開し、そして、それが終わると、朝食の準備ができた一階へ向かった。。

「いんちゅー

」

一階へ降りる階段の途中で、そんな声が聞こえてきた。

ん？・・誰だろ・・

と一瞬、思いかけて、そこで記憶が蘇る。。

あ。

・・・

「イーリア。」

そう微笑み、呟いたのは、彼女の親しくしている、少女の名前だつた。

そして、彼女の中で、今日が休日だという認識と、周囲の世界に対する認識が復活し、ゆっくり活動を開始する。

階段からダイニングに顔を出すと、扉の開いた玄関に、その少女の姿が確認できた。

「あ イフエリナ」

「こんにちわ。イーリア。」

特に休日にはよく、彼女を元を訪れる、その少女。イフエリナは、その少女のことが、とても好きだった。

「イフエリナ、今日どこかいぐー？」

ふと、何処かで聞いたようなセリフだと感じた。だが、それが何処だつたか、よく思い出せない。

「うーん。いつも行つてゐる場所ぐらいしか思いつかないよ。」

広くもなく狭すぎもない田舎町。

彼女には、目新しい場所が、思い付かなかつた。

「じゃー、久しぶりに、街行く??」

「。。うーん。そうだね。それじゃー、いこつか。」

少し間を置いてから、少女が笑顔で答える。

「あまり、遅くならないよ。おひるね。

母親が微笑む。

「うふ。ありがとう。」

軽く朝食をとり、準備が整うと、表へ出た。

いつものように、やうやく、その親しい少女と会話をしながら、駅へと向かった。  
陽光に照りされ、・・その温かさを、・・素肌に感じながら。

## Realize Network2(2)

雪・・

その場所は、雪が降っていた。

少女の住む田舎の街から、割と離れた所にあるその街。

「それほど離れていないのにな。」

ふと吹いた突風とも呼べない強めの風に、雪がブワッと舞う。

空には厚めの雲がかかり、薄暗い天候の街を、街灯が照らしている。何処か幻想を想わせるその景色に、しばし見入っていた。

「イフエリナ。」

ふと名前を呼ばれる。

一瞬あとで、後ろを振り向く。

それが自分の名前だと、わずかな瞬間、気付かなかつた。

「？」

表情でそう疑問を浮かべると、少女がにこりと笑つて言つ。

「いい。」

「。。そうだね」

その街の雰囲氣に呑まれてこよつこ、何処か落ち着いた面持ちで彼女は答えた。

・・なぜだらう。知つてゐる筈の場所なのに、知らない場所でもあるかのよつな氣がする。

歩きかけると、少女が振り返つて、

「楽しもつよ。」

そう言つた。

「。。」「少し田を閉じ、「うん。そうだね。」

微笑んだ。

それにしても・・

・何処かで見たような風景・・

そつ頭の片隅に、浮かぶ疑問。・・何故、そんなことを思つのう。

何を・・忘れているのだろう?

・・おかしいな。私。・  
軽く俯き、ゆっくり首を振ると、少女の後を追い、テクテクと歩き  
始めた。・・

・・・・・

「お～い イフェリナ～」

街の風景を眺めながら、少女の後をついて歩いていると、ふと前方を呼ばれた。

「？」彼女の方を見ると、一つの明るく灯されたショーウィンドウの前で、少女が手を振つて立つ。

「・・・微笑むでもなく、軽く表情を和らげると、やへ近づこうと、歩いていく。

その時、彼女の眼の前に、さまざまの映像が、連続で、フラッシュバックされた。。

「…」

街の風景に透過されるように現われたそれは、不意に断ち消えると、元の景色へと戻つた。

「あれ？」

ショーウィンドウを覗き込んでいた少女が、何かに気づいたように振り返つた。

「ねーねーおいでよ～？」そつと微笑つ。

「あ。うん。」

だが、何か気になり、上空を見上げる。

ゆつたり舞い降りる粉雪。その先の淀んだ空を眺めながら、そこで何かを見出すように、手を細めた。・・・

「ん?。・。どうしたの?。・。  
見上げていた顔を下ろす。

「ううん。」

「・・・」今度は街路の方へ、視線を移す。・・・

「私は、・・・何かを思い出そうとしている。?」

俯いて目を瞑る。・・・薄目を開け、何かを考えようとして、近くの少女が、少し困った顔で、私、に何か話しかけているのに気づき、止めた。・・・

「あ。うん。・・・いこつか。」そう微笑んで、歩き始める。

「どうしたのかな~。イフエリナ~。」

少々困った笑顔で、隣を歩き始める彼女。

・・・どうしたのかな、私。

ふと、眼を閉じる。・・・

そこは暗い世界。・・・不意に、周囲の世界の音や気配が、遠のいた。

意識の中から、それらに対する認識が、消えていくかのよつな。  
そんなことを感じていると、世界が遠のいて行くのが感じられて、  
あらゆる感覚が、遠くなつていき、そして、ついに消えた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ふと眼を覚ますと、・・・といつても、寝ていたわけではない。  
そこは、とても見覚えのある部屋の、その、倒された背もたれの上  
で、横たわっていた。

「・・・おはようございます。・・・軽く音楽でも流しまじょう

か。？」

そう、聞きなれた声。

・  
・  
・  
・  
・

「今、時間は・・?」

「今、2時を、少し回った所です。」

「やうか。」

「楽しめましたか?」

「・・それなりにね。」やう言つて微笑む。

「・・あ。風華さんから、通信が入りました。  
繋ぎますか?」

「ああ。つないで。」

「お~い。どうだつたー?」

「・・・・」

・あれが風華とは限らないな。

「・・なかなかいい目覚めだつた。・・笑。」

「やうじやなくて~。」

「うへん。どうなんだひつね~?」

「ま~。後でネタばらしするよ~

「そつか。わかった。」ふと眼を閉じ、そしてまた開く。

「またな。」

「うん。」

「じゃねー。」 さういふと、空間に展開していたモニターが閉じ、通信が終了する。

・・・

背もたれに頭をのせ、薄田を開けて、ゆっくりと空気を吸った。

あの世界での出来事。

そう長く居たわけでもない。

・・ちくしょ。シナリオの続きが気になるな。

「はは。」 苦笑い。

「どうしました?」

モニターの中の彩香さんが、そう問いかける。

「なんでもないよ。・・・また続き、やつらといふ。

「わうですか。」 と微笑む。

「うふ。それと、このまま眠るよ。」

「はい。。。ねやすみなさい。」

「あ。。 音楽、かけといてもいいでね?」

「わかりました。」

彼女は、・・・終始笑顔だった。

・・・

・・・

・

すぐ、眠りへと落ちる兆候が表れ、ゆっくり、ゆっくり、その中へ  
と、埋没していく。

・・・・明日は・・・何をしてみつ・・・

## Realize Network2 (3)

学校の屋上。その縁に腰掛け、遠くの景色を見ている。本来であれば、入ることのできない場所、何故ならそこは、落下防止の金網が、一部欠落していたからだ。

冷たすぎず、ちょうどよい空気の風が、肌をなで、通り過ぎていく。夕暮れ時、その遠くに落ちていぐ丸いオレンジを眺めている。

その前に佇む街並み。それも茜色に染まり。当然のように、赤一緒に染まった世界。

・さて、家へ帰るか。。

心地いい空氣に包まれたまま立ち上がり、家路につく。

ポケットから取り出した鍵で、ドアをしつかり施錠して。。

ひとつ風呂浴びて髪を拭きながら出でてみると、「ハヤトさん、風華さんから通信が入つてます」

と彩夏さんが伝えてくる。

「ん？ つないで？」 楓華の顔を映したサブモニタが映る。

「ハロー～ ハヤトー～」

「ん? なんだい?」

「あのむす～、今日、いい?」

「ん、あれか?」

「うん、ちょっと今夜続きをやりたいなあ～と思つて。」

「・・・まあ、続きを氣にならうことない」ともなこからな。  
いこよ。」

「なんか、冷めてるね～」

「うん。時間が経つて、なんか、冷めてきた。」 そう少し笑つ。

「う～ん、またやれば、絶対はまるつ～」

「やうかなー? 。。。何か、別のシナリオはないの?」

「あるけど、今のが一番お勧め」

「う～ん、やつぱり、何か自分で探してみると

「やつか～。じゃあ、気が向いたら、後で声かけてね?」

「ああ。じゃな。」

「うう。」そう言つて、通信が途切れ、モニタが閉じた。

それから彼は、プレイシナリオの概要を記したページを色々と見、面白そうなシナリオを探した。

それから数日して、

いくつか体験プレイ可能な部分をプレイし、物語を体験してみたが、これ、と言えるものには出会わなかつた。

そんなとき、風華からまた連絡が入る。

「ハロー 風華だよー」

「・・・・・ないね。」

「・・・えつと、って、なにが?」

「プレイシナリオ」

「・・・・・」

「ちよつと、散歩に出てくる」

「あ、うーん。こつこつしゃーい

散歩から戻ると、こつもの椅子にドン、と腰かけ、背を預ける。

今他にしたいこともないしな。。

風華の策に乗るよつた気がしないでもないが、続きをプレイしてみるか。

「彩夏さん、」

「はー。なんでしょう」笑顔で彩夏さんが現れる。

「風香に繋いで欲しい。ゲームの続きをよいつて。」

「はい。わかりました。」

「・・・今つながらなよつですね。オフラインメッセージ残しておきますか?」

「うーん、そうだね。じゃあ、後で続きしよいつて、伝えておいて。」

「はー。やうしますね。」

風呂に入つたり、軽く軽食を作つて食したりして、時間が経過していつた。

TVのニュースを何となく眺めていると、通信受信の音楽が鳴り、あつと風華からだりつて、思い当たる。

モニタが開くと、やはり風華の姿がアップで表示された。

「ハロー。風華だよー」

「ん。。？」

TVから顔を横に向けると、その笑顔が表示されていた。

「よつ」

「伝言みたよー」「やるのー?」

「ああ、他にないしね。。」

「そつかー」

「・・今から行くー?」

「そりだね。見ての通り、やることもなかつたし」

「じゃあー、向こうで待つてるねー」「そうこうして軽く手を上げ軽く振られ、モニタが閉じた。

目覚めるとそこはベッドの上。

白いシャツ、女の子らしく逃えた模様。

レースのカーテン、吹き込む風、

以前見た室内と同じ、違うのは、天候による雰囲気の違い、という  
ぐらいだらうか。

「・・・・」

ふと気付いたのは、今回は記憶がある、ということだらうか。

前回入ったときは、元居た世界での記憶が思い出せず、この世界で  
のキャラクターの記憶が主になっていた。

風華が気を利かせたせいか、ハヤト、としての記憶を持ち合わせた  
まま、この世界にエニしてきていた。

まあ考えてもみれば、元居た世界での記憶が消えている、というの  
も危ない感じがする。

その辺が大丈夫に設定されていなかつたら、そんな設定が許されて  
いるはずはないが、

記憶があつた方が、違つた自分、になる楽しみを味わえるのではないか？とも思える。気のせいかもしれないが。

しかし、今まで女の子女の子した格好をしていたんだな。

記憶を持つたまま改めて見ると、そんな格好をしている自分、それが今自分の姿なのだという感覚に、

少々恥ずかしさを覚える。と同時に・・・

「イフ・リナー？」

階下から、母親（この世界でのイフ・リナーの母親）の呼ぶ声がある。

「うわー、」「あ。はーい。」とカワイイ声で返してしまった。

「・・・・・」

「これは、前とは違つ。」

どうやらイフ・リナーとしての記憶は働いているようだ、この世界でなつきる、ことは可能な気配だった。

「いれは。計算してないか。」

何か計られたような気がするのは、気のせいだらうか？

おやりへ朝、はんが出来るとこづいたから、この格好で下

に降りるわけにもいかないから、着替えて降りたほうがいいだらうか。。

なんか思考が今一つ十分に働いてないような気がするが、取り合えず、それとなく働いているイフエリナの記憶を頼りに、着替えて降りたほうがいいだらう、と判断した。

家族だから、寝巻のままでいいことはないだらうか?と思いかけて、リビングが玄関と直結していることを思い出した。

そういえば、そうだった。

「・・・着替えるのか。」

以前は抵抗もなく、何の疑問も抱かずに、それが普段通りことであるように着替えていたが、

非常に、あれだ。。

・

・えつと、どうやって、着替えるんだっけ・・?

木製の古びた色合いの濃い茶色の階段を少女が降りてくる。

その顔は何か参ったなあ、とこつ感じで赤味が帶びておつ、ふうへ、と熱い？息を吐き出している。

「イフヒリナ。？」飯できてるよ。」

そつ言つてほほ笑む彼女の母。

「あ。うん。」

食卓の椅子に腰かける少女。

何処か潤んだ瞳は、朝食を見ているよつて、何処か遠くを見ている。

「イフヒリナ、今日はイーリアちゃんど、約束があるんじやない？」

「？」不意にそつ訊かれて、何かを探るよつて、その目を泳がせる。

そして、何かに思いあたつたよつて

「そつだつた。約束あるんだつた。今、何時かな？」と言つて、何処か夢から覚めたような顔で、時計を探している。

「あー、まだ時間は・・・ある、かな。うん。大丈夫。」

「？」

母親がきょとんとして疑問の表情を浮かべている。

「着替えは・・？ 済んでる。」下を見下ろして、そつ言つて

「？？」

少女は、少々混乱している。

「あはは。出かけてくるね～」そう口にやかに笑うと、まだ殆ど手を付けていない朝食を残し、肩にバッグを掛けると、表へ出た。

「・・・と、何処で待ち合わせだっけ。。？」

外に出てきてからそう思った。

・そんな約束したっけ？

でも母親が覚えていたのだから、約束はした筈だ。

・・・・

思い出そうとしてみるが、イフリナの記憶がつまく動かず、思い出せない。

・うーん。

「・・・（うしんは使えない。）

・イーリアの家は、何処だ？。

不意に、玄関の扉が開く。

「あ。ちょっと忘れ物。」

そう言つて一階にトタトタ駆け上がりっていく。

相変わらず、レースのカーテンが風にふわりと舞つている。

机の引き出しを開け、何かないかと探す。

・・・手帳か。

ページをパラパラと探していく。

イーリアの家の場所、とかは載つてないか。

・・・

・あ。

実際にシンプルな回答がそこに。

時計屋さんの前で待ち合わせ

時計屋・・といふと、自分が知つてゐるのは、前回プレイ時に、出てきた時計屋だな。

「うーん、そこ以外、知らないし。」

街の一角、天候は晴れ、まばらな雲が空をマーブルに染め、その下に両膝に手をつき、ショーウィンドウを覗き込んでいる少女が一人。緩やかな坂の中ほどにある店。

その街並みの街路、建物に囲まれた風景の間を、涼やかな風が吹き抜けてくる。

天候は穏やかで、冬場にしては暖かい陽気、吹き抜ける風を、心地よく感じた。

その少女の後ろに、少々息を切らせたちょっと背の高めな女の子の影がひとつ。

「お、お待たせ！」

「？」と振り返った少女。

「イーリア」 そう言つて微笑む

「あ」

名前を呼ばれて気がついたよつて、少女の方も微笑みを浮かべた。

「こいつか。」と、そう微笑みのまま言つて、

「うん」と少女の方も、その笑顔のまま応えた。。

## Realize Network 3 (1)

「こんちわ～」「イフヒリナ～」「

「ん?」窓際の椅子に腰かけて、頬杖をついて葉擦れの音を響かせて吹いてくる風を感じながら、考え事をしていた彼女。

「今日はね～　あや～・・じやなこ。えつと・・」やつまつて隣を見やる少女。

「どうしたの? イーリア?」

「アヤカです。」「――」「え・・」

「?」

「あ～・・、って、あれ? アヤカさん? 初めまして、でしたよね?」そうじつてほほ笑む。

「あー・・」

「ええ。初めまして。」そうじつてほほ笑み返すアヤカと名乗った少女。

「・・? イーリア?」

「あはは　なんでもない^ ^」

「? ?」

「あ。今降りるね。」

そう言つて階下にトントントン、と降りていく。

その外で、風に吹かれながら、話し込む2人。

「今完全に入っちゃってるんだね・・」

「ええ、データではそうなつてますね。」

アヤカと名乗つた彩香さん（そのまま）は、その登場人物にふさわしい少女らしい姿で、にこやかにほほ笑んだ。

「ガチャ」

と扉が開くと、その普段運動をしない軽く上気したほほの朱い少女が飛び出していく。

少女、と呼ぶべきか。少年、と呼ぶべきか。

この世界では彼女、は、段々とイフエリナの人格寄りになつて行つたというか、

イーリアにもわからないのだが、どういう設定がなされているのか、

段々と、この世界にいる時には、元の世界での記憶を喪失し、イフエリナ、としての性質が強くなつていった。

今では完全に、こちらの世界にいるときは、イフエリナという少女のそれと相違なかつた。

「（・・・大丈夫かな？ハヤト・・・）」

何か、イーリアには、いや、風華には、ハヤトが何処か、居なくなつてしまつよつた気がしてならなかつた。

元の世界に戻つても、もつハヤトには会えないのではないか、そんな気がして・・・

プレイ期間の終了する前での間、こちらの世界で過ごすことになつている今回。

「（彩香さんは、・・・エーダから、何か情報持つてゐんじやないのかな・・?）」

わからぬけれど、

ビーフショット・・・途中でプレイやめる」ともどれるほど、

全然なんでもなかつたら、他のプレイヤーに迷惑がかつやつだしな

ー・・

あとで、彩香さんに聞こてみよつ。・・情報持つてなくとも、何か調べて貰えるかも・・

近くの木陰で話しているアヤカさんと、ハヤト？を見ながら、一人考えている風華。

「へへ？」（ふと）ひづく少女。

「あ。。」

その無邪気な表情を見ていると、特に問題なさうにも見える。一見。

「（考え過ぎだといいけど・・・）」

## Realize Network3(2)

「おっは～。ハヤトー」

「あ。おはよ、つゝく」

その反応に一瞬寒気を覚えた少女。その名は風華。

何かが違う。

特になんとわない会話。ただのあいさつ。

「ん? ビビったの? へへ」

その顔でこいやかに返されても・・・

その瞬間、風華の世界が何処かで音を立てて崩れていへよつた、そんな気がした。

風華の中の、何か肝心な何かが、失われてしまったようだ。そんな直観だ。

「あのわ、ハヤト。」何時になく(表情は(やかだが)シリアルになつてゐる?彼女。

「ん?」わざわざほほ笑む・・誰?

「イフエリナ?」

「ん? なに? ああ。」ほほ笑んだ顔のまま固まる。

「あ。あ~。」

「あ、あつはま~。なんか、向こうのキャラ、覚めてなくてな  
くても。」

やつ言つて頬を軽く指でかく。

風華は直感していた。

この人は、イフェリナだ・。

「えつと、・・じゃあ、またね。」やつ言つて、いつものハヤトら  
しからぬ、呆気ない態度で、去つていいく彼・・

「・・・あ~・・」これは、ますい。何が?・・ますいぞ?・・

ハヤトに連絡するか?

風華はモニターの前で、その画面を見つめたまま。固まつていた。

いや、連絡してもしましたあのキャラで返せられたひ・・・

でも、もしかしたら、もひ、元のハヤトに戻ってるかも。・?

でも・・

もし・・

「・・・秘匿通話・・彩香さんに繋いで?・」

「はー?」

「あ。彩香さん、風華だけど。」

「はいへへ」

「あの、・・・あのゲームについて、調べてほしいんだけど。」

「あのゲームといふと、先日プレイした、あのゲームですか?」

「うん。」

「ハヤトが、・・おかしいから。」

「ハヤトさん？」

「うん、学校での様子も、変だつたから。なんか、女の子みたいだつた。いや、男だけ。性格が・・イフヒリナだよ、あれは。」

「家では、別段おかしくないですけど。」

やつぱり彩香さんはほほ笑む。

「え・・」そんな筈ないんだけど。

風華は、また何か感じたよつて、彩香さんも何かおかしい、気づいた。

「うーん。わかつた。・・何か様子おかしかつたら、連絡貰えるかな??」

「わかりましたへへ そつしますね。」

「うん。それじゃあね。」何とか微笑みを作ると、通信の終わつた画面を見つめたまま、しばし時間が経つ。

「どうじょひ・・・」



それから数日して、学校へ行くと、奇妙なことが起つた。

クラスを除くと、いつも通り賑やかなクラスの中心に、女の子が集まり、その中に、一人の見知らぬ少女が輪の中でほほ笑んでいた。

「？」・・誰かな？

でも何処か、初めてとは思えない雰囲気を持っているその少女。

どこかで・・会つたかな？

「こんにちわ」

近寄つていつて挨拶すると、

「あへへ」と少女が笑う。

「え・・？」その笑顔に、どこか寒気を覚えた風華。

笑いかけた笑顔が、半ば崩れたまま凍りつく。

直観的な少女。よく気がつくね、と言われることはあったが、こういったこと、によく気がつく、ということは周りにあまり知られていない。

「こんにちわ。」

一瞬、「あへへイーリア。」とか返されるかと思つた彼女は、ちよつと拍子抜けした感じで。

あれ、・・・思い過ごしかな・・

「初めまして。」そうほほ笑むその子。

「あ、・・あ～初めまして～。」

雰囲気が、彼女に似ていたから、あり得るはずはないのに、イフエリナがこの世界に現れたのかと思つてしまつた。

簡単な自己紹介を終えると、軽く挨拶して、ハヤトの姿を探し始める。

「ん・・」今日はまだ来てないのかな。

それから、ハヤトは現れなかつた。

教師の説明によると、（彩香さんからそんな話はなかつたが）病院に入院したらしい。

あれ？と思つた。

原因不明の急病らしく、意識不明で面会謝絶という話だった。

その話を聞いて、「え・・・」と言葉のなかつた少女。

（・・お、かしいな・・なんで・・?）

病院に一応赴いて、近しい友人であると告げても、やはり”彼”に会つことはできなかつた。

意識不明だから、姿を見るぐらいで、話すことはもちろんできないが、

彼女には疑問があつた。半ば信じ切れていない。本当に、そんなことになつてゐるのか、自分の目で確認したかった。

「（・・・どうしよう。彩香さんに連絡入れて・・・でも彼女は・・・何かおかしいんだよな。）」

A.I.を使つていらない風華。

調べものなどは、自分ですること多かつた。

彼女が設定したAIを、なぜハヤトに送ったかと言えば、それは彼が、機械音痴というほどでもなかつたが、コンピュータやネットについて、少し使いづらい側面を感じていたからだった。

それを見た風華が、AIを導入することを勧めたのだった。

ちょっと、調べてみる必要があるかな。。

彼女がそう思つたのは、AIが勝手に暴走することは考えにくいのと、裏で誰かが糸を引いている、そんな意図を感じたからだ。

携帯端末で、自宅のPCにアクセスする。

そこからリストを呼び出し、あるネットの知り合いの連絡先を引き出す。

”彼”いや、彼女？（性別不明）なら、何か調べられるかも知れない。

一人で動くのは、何か危険な香りがした。

何となく、何となく、彼女を感じてることだった。

彼女は学校に顔を出すると、そのイフリナに雰囲気の似ている少女と話す。

「（ヒュウ・・これは、・・とてもハヤトと関連していく気がする。）

そのじちらのことを知らない？少女と話しても、何か情報を引き出せるとも限らない。

だが、何か、とっかかりのようなものを掴めるのではないか？いや、もしかしたら、掴めるかもしれない、程度のものだったが、

藁にもすがる思い、とこうのは言に過ぎだが、今の彼女には、何をどうすれば”答え”を引き出せるのか、未だ分からなかつた。

ある時、ふと、そう拍子抜けするほどに、”面会謝絶”が解除された、との一報が告げられた。

「え・・」それは意外な展開だった。彼女にとつては。

彼女の行き過ぎた考え方、そう思わせようとするかのよひに、少なくとも、その時は、そんな風に思えた。

彼の存在を隠匿する何らかの裏の意図が、働いていると考えていた。

だが、病院で依然、意識不明のまま横たわっているハヤトの姿を見た時、

それまでの疑惑が溶解していくような感じがして、いや、まだ早い。

ベッドの周囲の状況を確認して、通信回線などと繋がっていないかなどを、田認し、

一人のときに、実際に周囲の状況を軽く調べた彼女。

「・・」何もない。

それまでの疑問が崩落していくのを感じた。

じゃあ、彼女は？・・イフヒリナに雰囲気の似ている少女。

それと、ハヤトの異変・・

おかしい・・

でもこうして、特に何もなく、ハヤト・・？はベッドで長く眠りに就いている。

「あれ・・」両の瞳から、涙が零れ落ちる。「・・何やつてんだろ・・私。」

「ハヤト・・」その手を軽く掴む。「・・待ってるから・・」

「ね？」

・・・・・

2週間後。

そのAIプログラムは、彩香、といつ。

実際に、綾香、という少女がリアルについて、その少女のキャラクターをモデルにキャラ設定をしたAIが彩香さんである。

その彩さんは、現在宙に浮いた状態。

そのPCの使い主である少年が、意識不明なまま病院に入院しているからだ。

そのデータを風華が転送して、自分のコンピュータに入れて使っている。

ハヤトのところで、自律起動し、自己修正プログラムによって自己を更新し続けた彼女は、なかなかに便利なツール、いや、とても頭のいい女の子に成長していた。

初期設定をした彼女自身が、AIってこんなに便利なものだったのか、と思つほどだった。

風華から見ればちょっと機械音痴（コンピュータ音痴？）だったハ

ヤも、この間で、コンピュータを使こなせるようになつていたらいい。

自ら修正プログラムだけでは、これまで変化しない。

そんな彩さんとの日々が始まつて、ある程度経つた今。

学校のその少女とも、そう、例のハヤトがやつていたキャラ、イフエリナに雰囲気の似た少女とも、割と仲良くなつていた。

そうやつ、トントン拍子に事が流れているわけでもない。

彼女の中の、なぜ?...といつ疑惑は、まだ解け切つていない。

それでも、彼女は、自分の解する世界の中で、自らの日々を送らねばならなかつたのだ。

疑問もあるが、世界への懸念も存在する。

そう、だけ彩香さんとの日々も、学校でのそのイフエリナに似た少女と始まつた日々も、

彼女には、悪くないものだつた。

とこつよつ、どこかでシコリを残しつつも、いい感じじゃないか、と想ご始めたのは

、十分な”世界”がそこにはあったのだ。

そこは海。 あつたりと言つたら海に失礼だが、何処にでもある  
よつで、何処にでもない海。

その日は天氣がいいにも関わらず、空は晴れているのに、何処かそ  
れは何処か暗い印象があり、涼やかな風はそれを尚更印象付けてい  
る。

そこに少女が一人、海風に吹かれて笑顔で海の向こうを見渡してい  
る。

風華はそんな姿を眺めながら、その姿に過ぎ去つたもう遠い過去で  
もあるかのような世界を重ねていた。

自分から誘つた。

何時ものよつて、何時もの、当たり前のことであるかのよつな  
ことを持ち出す感じで、

別にそれに違和感など感じなかつた。

楽しめればいい。ぐらいに考えていた。

だから、田の前の少女と彼女の今の周囲の世界は、その対比の中で、  
何か虚しくも酷な現実を感じさせるよつで。

その目の前に佇んだ世界を、その美しくも物悲しくもある世界を、  
ただ直視することしかできなかつた。

「イフヒリナ」

そう呼ばれた少女は、「あへへ」とじりじりを振り返ると、「風華ちゃん~。」

と風に吹かれる衣服を纏いながら、笑顔でじりじりを見ている。

「・・・・・」

風が突風のように吹いて、何かが言われているがそれが分からない。

「え?・・・」

そこで、夢は途切れた。・・

目覚めると、開いた目の先には明るい朝の部屋。

ふかふかのベッドの上で彼女の脳は微睡の中から覚醒しようとしない。

「なんて夢だ・・」

横に頭を動かすと、半透明の時計が空間に表示されていく。

「おはよう！」・・・ おはよう～～ 風華ちゃん。」

彩香さんが朝の挨拶。

「ギクシ。 洒落にならないよ。 それ・・・」

「はい？」 「なにかな？」 そうこうしてニッコリ微笑む。

ハヤトのところにきて口調が丁寧語だった彼女に、  
もつとフランクな話し方でいいよ。 といったのは風華だった。  
だが見ていた夢と重なつて、少し嫌な気分になつた。

「はあ・・・トースト焼いとこてくれる？」

彩香さんにそつと、「はいな」と返事が返つてくれる。（キヤ  
ラがまだ定まつてない）

別にコンピュータプログラムがトーストを焼くわけじゃない。当た  
り前だ。

「あ。あと、ホールー。」

」の辺は古典的な彼女。

割とお金持ちな風華の家、彼女は一人暮らしだつたが、AI用のボディを買つのに、それほど大金が必要というわけでもない。

昔はそうだったが、今では量産され、手頃な値段で手に入るようになつていた。

モニタ上の彩香さんのグラフィックに合わせ、骨格部分とかボディ、顔とかオーダーメイドで作つてある。

だがオーダーメイド自体は今はそれほど高くない。基本スペック（搭載されるコンピュータや骨格となる部分の基本構造）はどれも一緒だつたから。

要は、搭載するコンピュータや基本構造、動作は一緒で、「形」の部分だけオーダーメイドしている。

そういう仕組みが今はがあるので、それを利用して彩香さんのボディを注文したのだ。

「ふわあ～」大きな口を開ける風華。

「今日は。。」するとすかさず彼女の前に投影モニタが大小2・3開き、今日のスケジュールが表示されている。

「うへん、あんま空きないなあ～」

「なにか、スキップできる授業ないかな～？」

「ね～、彩香さん？」

「あ。・・・ちよっと待つて・・・待つてね～～」

何故か目玉焼きをフライパンの上でジャンプさせて返している彼女。  
・・あれ。

見ると、キッチンの上に、朝食の材料が一通りボールに入つておかれていた。

「彩香さん。。そんなにいらないんだけど～。」やうじつて苦笑する。

「えっと、・・はい。データ反映させておきました。」「た、、してお・・「あ～、うん ありがとう～」カップのコーヒーを啜りながら、

スケジュールに反映された、飛ばしても単位に影響しない授業のデータを表示する。

「うー・・」カップを口に付けたまま、それを見ている。

「彩香さん。。」

「は～い？」

「それ、食べないとダメかな～？」

学校。・・今朝の夢。その少女とは、今では友達だった。

「おっは～ 元氣い～？ 優花。」

「あ。～～ おはよう～ 風華ちゃん～」

その少女は、まるでハヤトに摩り替わるよう、風華の親しき付き合つ友人となつていた。

イフエリナ。・・別にハヤトがイフエリナ、というわけではない。

それは彼がプレイしていた一つのキャラクターに過ぎない。

ハヤトがイフエリナのような表情をしたのだけ、そのときはまだゲームのキャラから抜けきつていなかつただけなのかもしれない。

だから、重ねるのはどうかとも思うのだが、どうじてか、優花と話していると、イフエリナと、・・いや、シナリオの中の彼と話しているような気がしてしまるのは気のせいなのだろうか。。

まだ、引きずっているのかな・・?

少女は、放課後、風華を海へと誘う。・・

ただの偶然にしては、出来すぎている気がしたが、それも、・・少しは驚いたが・・気にしないことにして、彼女は友達の彼女と日常会話をしながら、

海へと向かった。

・・海へついてみて、彼女は少しギクリとした。

そこは、彼、ハヤトと、以前何度か訪れたことのある場所だったからだ。

「・・・・」何かまた信じられないことが起こっているような気がして、その海の先を眺めていた少女。

「風華ちゃんへへ」 そういうて呼ばれた方を振り返ると、

少女は、風に吹かれ、衣服をそれに揺らしながら、その微笑みの中に、じちらを見ていた。

その時、彼女の携帯端末に、ある一通のメールが届いていたことに、  
風華は、まだ気づいていなかつた。・・

「風華ちゃんへへ」

そう言つてほほ笑んだ彼女は、ある一つのことを言った。

自宅のマンションに着くと、彼女はぐつたりとソファーにもたれかかつた。

夕暮れを過ぎた薄暗闇の世界。照明もつけないままの室内は薄暗く、開け放つた窓からレースのカーテンを揺らす風が吹き込んでいる。

室内には誰もいない。風華以外。

彩香さんは買い物にでも出かけたのか、吹き込む風だけが、室内に動的な空気をもたらしていた。

「ふう」溜息をつく。

その場所での出来事を思い出す。

海風に爽やかに吹かれる少女は、ニッコリほほ笑むと、彼女にある

「」と告げた。

「風華ちゃんへへ」

「？」 そう呼ばれた少女は、その子の方に視線を向けた。

「あのね。話して置きたいことがあるんだよ」

やつこひど、少女は両手を後ろに組むと、やや前向き姿勢になり、

「・・・・・」

その先は思に出したくない。

何故、そんなことを言つたんだよ・・・

じやあ、・・

「ふう。」

溜息をつき、起き上ると、ポケットに突つ込んであつた携帯端末

を机の上に置いた。・・

と、そこで、携帯のランプが点滅していることに気づく。

あれ？

そうか・・

携帯のタッチパネルに軽く触れる。・・半透明のポップアップが開く。

それは、以前連絡した、とあるネットやコンピュータに詳しい知人からのメールだった。

そういえば、調べてほしいって、メールしておいたんだっけっか。

・・・・・そのメールを読んで、彼女はとある事実を告げられる。

いや、それが事実だと認めたくないと、どこかで思っている。

だが、昼間の一件もある。

彼女、優花が言い放ったその言葉は。・・

「私が、誰だか分かるかな？」 そう微笑んでいる彼女。

「・・・・」 そんなセリフを聞かされれば、また嫌な展開を思い当つてしまふ。

「風華ちゃんへへ」 「えつとね。」

「・・・ちよつと待つた。」 さう言つて手で制する。

「？」 とハテナ顔できよとんとする彼女。

「なんだか、す「」に嫌なこと、言われそつな気がするわ・・

「あはは・・。嫌、なの、かな・・？」 「これから告げられるだろ」 つ事実を知つている彼女は、そつと笑つ。

「だつてさ・・？」 あなたは・・」「私は優花だよ?」 そう言つて笑つ。

「・・・・・・・・・・・・・・」「それだけ・・?」

「ううう。」 その表情には常時、にこやかな笑みが浮かんでいる。

まるで、何かとても楽しいことを、じつにいるかのよひと、いや、そうなのだろう、実際。

だから、風華は困つてゐる。その告げられよつとしている真実と、それを楽しんでいる彼女。

そんな現実を認めたくない自分。

感では、 そうなのだろうと、 感じ取ってしまっているから。

だから、 その言葉を告げられたとき、 彼女の中で、 何かが、 ・・いや、 確実に彼女の世界が崩落していくのを、 感じずにはいられなかつた。

まるで、 その音が、 聞こえそうなほどに。

その時、 確実に彼女の中で、 何かが終わり、 そして、 これは困ることなのだが、 （少なくともその頃の彼女にとっては。） 新しい何かが、 始まつて行つた。

そう、 それが、 彼女達の関係の、 新しい世界の、 始まりだった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「私はね。へへ。・・ハヤトだよ？」

バツ、と彼女は眼を見開く。

すじい嫌なこと思い出した。

なんだつて？　・・ハヤ・・・  
て。　・・・・・・・・・・・・・・

あの子が。。へへ；

ハ・・・・・・ハヤト？

・・・・・・・・

ダメだ・・・・・

『あのね。風華ちゃん。』

『・・・・・』

そこから、彼女なりの簡単な説明が話された。

それと、メールの一件。

「だつて、病院には何も、・・・細工した節はなかつたんだよ？」

なのに。・・・

『病院で寝ているのは、確かに私だよ？』

『・・・・・』

そのメールには、水面下で、何か工作されたらしことことが書かれていた。

聞こえの悪い言い方をすれば、裏で何かが動いたらしき、とのことです。

それと今回の一件。

『でも、これが、今の私なんだよ>>』

『・・・・・』

相変わらず、海の爽やかな風が吹いている。

こんな状況でも、海風は涼やかで。。

『・・・・・』 眼を閉じて、・・・その言葉を噛みしめている。・・  
私はね。ハヤトだよ?^ ^ これが、今の私なんだよ>>

・・・・・

・・・・・

・・・

・

現実を受け入れるには、時間がかかりそうだった。

その新しくもたらされた世界に慣れるまで、しばらく時間がかかる  
であろうことが感じられた。

それが、真実であると、じつじつと証明する、直感ではそれが正しいと告げていて、だが、彼女が言つてこなことが、嘘だと思った  
い自分もいて、・・

今までに直感が外れていたことも、・・いや、実は外れではなく、前回はずれたと思ったのは、実はあたつっていたのだが、だとすると、いや、まだ当たつていると断定するこも、・・

彼女は少々混乱しているようだった。

それは、そこから始まる新しい日々の、ほんの始まりの出来事だった。・・

ある時一通のメールが来る。

「あの場所で待ってるよ^\_^」

一瞬、何のことかと思つた。

だが、送り主が優花、となつていて

”あの場所”・・・そのとき、思い当たるのは、一つしかなかつた。

これまでの優花との関係の中で、あの場所、と共に通頃そして通じる  
ような場所といえば、あそこしかなかつた。

しかし何故、その世界にもう一度。・・・

自らに帰ると、彩香さんが出迎えてくれる。

「おかえりなさい。」 そつといつて微笑む。

「ただいま。」 そつといつて笑う。

「と、あのさ。優花。・・・つまりハヤトから、連絡来て、例の場所  
で待つてる、と。」「そつと言つてきたんだ。」

「へへ」

「エハ思つへ、彩香さん。」

「行つてくのとこですよ。」ルツブリヒが机に笑つてこる。

「でも、今になつて、あそこの金おつとある理由つて何だらう。・

・

「ねえ。彩香さん。？」

「行つてみればわかります。へへ」

「」何か言おうとして、止めた。

直観の鋭い彼女。何か知つてゐるのかな?と思つた。

だが彼女の言う通り、行つてみるしか知る術はなさうだった。

「ど。その前に、。。」「まだ時間はあるか。」腕時計を見る。

「彩香さん、軽く夕食摂りたいんだけど。」笑顔でそう囁つて、

「へへ今、作りますね。」そう言って、台所の上に乗つてこりの匂い物がごに入つた材料の方へ向つて行つた。

夕食を作る間、ソファーの背もたれに体勢低く寄りかかって、天井を見上げて考え方をしていた。

ハヤト・・・何を考えている?

何故今になつて、あの場所で会おうと・・・?

考えても考えても、分からなかつた。

やがて夕食ができると、割と豪華な料理がテーブルの上に並び、夕食を取る。

そんな中、彼女は彩香さんとの会話に花を咲かせ、久しぶりに何処かしか、元気な様子を見せていた風華だった。

「よしひ、（活力充填つ。）行くよつ。」

心なしか、気合いを入れるよつと、そう言い放つと、専用シートに座つた。

久しぶりのダイブだつた。

ハヤトの一件があつて以来、ネットに潜ることが少なくなり、そしてダイブしなくなり、何時しか何週間もの時間が経つていた。

元気が出ているのは、久く潜つていのいその世界に行くことにも

起因しそうだった。

本来、そつこいつ世界に漫つて過ぐすことが多かつた彼女。

思えば、じに数週間、彼女のペースは崩れっぱなしだったよつて思える。

何故だか彼女は、その場所で会つ、その言葉を聞いてから、元気が出てきてるよつて感じられた。

モニタの上を軽く手を滑りせる。

「メインシステムオン。」

埃をかぶつたよつなそのシステムが起動する。

「こつてらつしゃいへへ」 彩香さんが見送つてくれる。

「へへ 行つてくるね。」

そう言って、一時の別れを告げると、少女はその世界へと移行していく。

その丘は、草原というか、花畠に近い。

花びらが風に舞い、それがまるでスクリーンセイバーのよひこ、二人の少女の周囲に展開している。

以前訪れたことのあるこの場所。一人で偶然見つけた、黄泉の世界であるかのようなこの場所は、一人にとって、とても特徴的な思い出の場所となつた。

少女にメールで言われた時、パツとこの場所が浮かんだ。

だからその場所に呼ばれたとき、何があるな。と彼女は思った。

「ハヤト・・」

「優花・・いや、今はイフエリナだよ。」 そう言つて笑う。

・ ・ ・ ・

「あのせ、。聞いておきたいことが。あるんだけど。」  
少しの沈黙の後、彼女はそう訊いた。

何故か聞くのが躊躇われて、引きずつたまま、今に至つてしまつたこと。

「・・・何かな？へへ」それは、何を訊かれるのか、知つているような顔だった。

・・・・・

「イフエリナ。・・・なぜそうなつた？」

・・・・「話すと長くなるよ。・・・・でも、風華ちゃんには、・・イーリアちゃんには、話して置きたいと思つよ。」

その時、彼女が指先で軽く中空にサインを描くと、空間に透明なモニタが出現し、一、二指を走らせると、

それまで、花びら舞う草原のよつな風景が、空を舞う花弁が過ぎ去ると共に、世界が暗転し、そして、幾重もの世界、ビジョンとでも言つべきいくつものグラフィックがフラッシュバックし、遠い暗闇の先から、何か景色が・・いや、世界の塊とでも言つべきものが急速に迫ってきて、周囲にもの凄い勢いで展開した。

そこは、ヨーロッパの街並み、とでも言つべき、それに酷似した場所だった。

といつも、それはヨーロッパ、の何処かの様だった。

「！？・・」そこは仮想現実世界と言うにはあまりにリアル過ぎて、突然現実世界のヨーロッパの何処かに移動したかのよつな感覚に襲われた。

辺りを見回してくる彼女。

「…………」そうハヤト…………いや、イフエリナ、今はビハリでもいい、「」と訊く。

「じめんね。驚かせて」

「…………まだ、中なんだよ、ね？？」

「うん。まだ、ね。」

「…………まだ……まだ……」彼女はその意味を考えた。

だが、明確な答えは出さない。

「…………何が、言いたいの…………？」

それに、少女は、ふと眼を閉じ、答えた。

「まだ、中。」

その言葉だけで、彼女の言わんとしている意味が、感じ取れた。

・ 感覚フィードバックか。

「…………何となく…………でもそれより、イフエリナ…………いや、ハヤト。君は、どうしてその場所に立つことになったの？」「私には、その方が気になる。」

「それは、私が、今の私を、選んだからだよ。」

「何が、。。起きたの？」

「私は、。。私である」とを選んだ。。それだけだよ。」

「。。。」

「経緯は話せない」と云ふとか。。

「仕方ないなあ。。」

「綾香さん、ちよつと来てもらひやる?」と、その名を呼んだ。

「彩香さん。。?」

すると、また景色が一変し、いや、そこはまだヨーロッパの街並みだが、。。」は、。・あのシナリオの中か。

同じような景色だが、意味合いが変わっている。雰囲気が一変している。

何処か懐かしいその場所は、彼女に向となく、安心感のようなものを『与えた。

「。。。^\_^」

「。。。」

気づき、驚いてそちらの方を向くと、そこに、一人の女性とも、少女とも、どちらとも言えない雰囲気の女が立っていた。

「こんにちわ。」そづーちゃん微笑んだ。

「誰……と、そこで、さつきハヤトが言ったセリフを思い出す。・・・「彩・・、いや。・・綾香・・さん?」

柔かな一陣の風が、吹き抜けた。何かの演出であるかのよう。

・誰かが吹かせた風かな。

芹沢 綾香・・ A エナビゲーションプログラム「彩香」のモデルにして、そのプログラム自体を、自分で作った女性。

要は、自分をモデルに人格プログラムを作ったのだ。

風華の家に居る「彩香」は、風華が設定を色々とカスタマイズして、ハヤトに渡したプログラムだった。

「私が優花ちゃんを誘ったんだよ。」

いきなり答えが出てきた。

「優花ちひや・・ あなたが黒幕なの?」

「黒幕、か。 そういう捉え方、も出来るわね?」「そづー、私が黒幕つ なんてね」

「あ、・・・」あつけにとらわれている風華。

「優花ちゃんには、私に協力して貰つてます。」そういってニギハリ。

「・・・・・」風華は釈然としない気分だった。

「何故ハヤトなの？ それと、何故イフェリナにする必要があつたの？？」

「へへハヤト君には、以前、なにかと協力してもらつてね。それで、彼に今も色々と手伝つて貰つてるんだよ。・・・ それとハヤト君がイフェリナちゃんなつた訳は、彼がそう望んだから、・・彼女になつたつてわけ。」そう言つて、フフ。と笑う。

「・・・・・」風華は納得できないような顔で黙した。

そして、また景色は移り変わる。

それは昔あつたコンピュータのモニタの背景のようこそじつて、クオリティは高いものとして、移り変わりゆく。

「『めん。なんか、意図した状況に引き込もうとしてるみたいにしか見えないわ。』

そこで、ハヤトの表情が少し変化する。何か、指摘されると思つていなかつたことを指摘されたよつた。そんな印象を受けた。

「ハヤト、あなたが、何を考えているのか、何となくわかつた気がした。

「だけど、私は、その田論見には参加しないよ。」「私が望んでいることは、これとは違う。」そつと笑つて、微かに笑つた。

何か苦ごとを、言つた後のようだ。

「「めんね。 風華ちゃん。」

「風華ちゃんの言つてることは事実だよ。」そつと笑つて笑顔を戻す。

「だけど、と少女は続ける。「風香ちゃんが、したいよつてしないことは、残念なことだよ。だから、」

「ハヤト、いや。。。優花。。。がんばってねへへ」そつと笑つて、彼女は笑顔だった。

それは一つの別れを、告げる葉のようだ。

そうして、一つの幕が降りる。

それは、それから続く、彼女の新しい物語の、序曲なのかも知れなかつた。



桜咲き、そよ風に花びら舞うその場所で、ハヤトは、その先の暗い空を見つめてくる。

「風華ちゃん・・・」

ああは言ったものの、ハヤトこな、風華との関わりがこれで終わりになってしまったのは、残念に思えてならなかつた。

「イフ、リナちゃん・・・、もううるさい。」

綾香にそつぱれ、「うん・・・」と返事をするハヤト。

何か肝心なことを語れていいる気がする。

その日々に残した何か。

それと取り戻したいと思つが、どうすればいいかも分からない。

だから、今がある。・・・

「彩香さん、トースト焼いといてくれる?」

いつも通りに思える日々に、足りなくなつた何か。

その日々にハヤトがいなくなつたのはわかつてゐる。

でもそういう単純なことじやなく、彼がいなくなつただけじやなくて、足りなくなつた何か。

それは、ハヤトがいるから、いなーから、じやなく、過去にはあって今にはない何かだ。

その原因を彼に見出すのは、違つとわかつてゐる。

だが、今はこれでいい、と何処かで思つてしまつてゐる自分がいる。

本当は底の方で、変わつてほしい、と思つてゐる。

だが変えられない何か、をその世界に見出してこらへるといつのか。

いつも通り、過去の通り、彼女、優花は学校に現れ、同じ教室で過ごしている。

だが、話すことはなくなつた、どこか距離の開いた二人。

窓の外の空と街並みを眺め、窓枠のカーテンを揺らす風に心地よさを感じる。

こいつしていると、足りない何か、などないかのよう思える。

そう、思えるの、一人になると、どうも、昔と今の対比が意識されてならない。

清算したつもりだったんだが。

それを取り戻したいと想いながらも、どうすればいいか分からず、やきもきする日々。

それこそが、清算すべき現実かもしけなかつた。

さよなら、みたいな別れ方をしたあの日、それが引っ掛かって、今さら彼女に近づくのは、と気が咎められる。

なんてベタな状況に捕らわれているんだろう。

自分がこんな状況になるなんて、思つていなかつた。

早い話、ハヤトと昔みたいに、・・でも今の優花を受け入れなかつたら、関係が修復できないことも、

だから、彼女は、ハヤトの昔の姿に拘つてゐるのか。

いや、それが正解でないことは、もう分かっている。

捨てられない自分がいる。

もう、変わってしまった、だなんて思つことが間違えただとこいつとも、もう気づいていた。

これは私の選んだことだ。

人はそう言つ。

だが、それは、本当に自分の選んだことだつて、言えるんだろ？  
と私は思う。

ここ数年、このネットワーク、つていつ世界に出来つてから、よく  
そう思ひよになつた。

その世界では、多くの人たちが、ゲームの中でも、または体験シナリ  
オの中で、別の役柄になり、

別の人間になつてゐる。演じる、なんてものじやない、その世界の、  
その人物そのもの、といつてもいいぐらい、  
その役柄にどつぱり浸かつてゐる。

今回のハヤトのよひなケースを見ると、余計にそう思える。

「彼」は彼女になつた。

ゲームとか、シナリオの中だけではない。

それが現実にまで及んで、彼女になつてしまつた。

いや、それを「しまつた」と言つべきかどうか、

それはむしろ、彼、彼女、にとつては好ましいことなのかも知れなかつた。

だから私は、友達として、彼が彼女になつたことを、喜んであげるべきかも知れなかつた。

捨てきれない何かと、こうした方がいいと思える現実。

その間で、私は、迷つていた。

だから、私の未来は、・・もう分かつていていたことだつたが、

彼女になつた彼、を受け入れること、だつた。・・

夕暮れ近い海を眺めている。遠くの空を・・

涼風が心地よく、少し涼しそぎるほどの風が尚更ちょいちょいかつた。

ここは「彼」と彼女がよく会つた場所だ。

今、彼は彼女になり、今ここに会つことはなかつた。

まるで一人の人を亡くしたかのような錯覚に陥る場所。

彼は生きてこるもの、もつくなつた過去を想つみつし、遠くの海の空を眺めていた。

そんな中、目を閉じて、風の中のとつと眠りに落ちかけていると、

「風華ちやーん。」

と遠くから声が聞こえてくる。

「ん？」

でも、声が違つ。

それは優花のものではない。

そつ冷静に分析している頭を眠りから引き起しつつ、

声の響こてきただらつ方向を見上げた。

「やつぱつこなこたー」

「何処かで聞いたセリフだな。・・・

頭の片隅でそつ思いながら、ああ、そつか、昔私が・・・

と過去の自分に思い当たる。

昔、とこつぱつせではないその日々が、もう遠く過ぎ去つた過去の

よつて思ひへる。

「やあ、蓮ちゃん。」そつまつて笑う風華。

「へへ なんか、哀愁漂つてたよ～？」

「はは。・・蓮ちゃんには、もつ場所覚えられちゃったね。」

「うん。こつこつも「こだもーん。思に出の場所？」

彼女はハヤトと私が、ここで会つ機会が多かつたのを知らない。

「うふ。ちよつとね。」

「キレイだね～。」先ほど彼女がそつしてたみたいに、遠い空を眺めてそつに語る。

「うふ。ここの場所、・・好き、だつたんだ。」

「？ ・・だつたつて、今は好きじゃないの？」

「好き、・・な、気がする。・・よつなそつだなこよつな・・。」

「あは。・・複雑なんだー」

「やつ。・・だと思ひ。」「うふ。そつなんだ、な。」

「なんか、風華ちゃん、男の子みたい～」

「・・・そつか。そつかも、ね。」

そう、そつかられてみれば、最近ナーバスになつてることが多い。  
それだけが理由か分からぬが、随分、キャラが変わつたと、自分  
でも思つ。

『また、海かー』

あの頃の自分は、何処へ行つてしまつたのか。

まるで別人だよね。自分でもそつか。

「蓮ちゃんは、ここに、何して?」

浸つていた顔を上げ、少女にそつか訊く。

「あのねー。風華ちゃんを、連れに来たの。」そつかつてつづつ  
笑う。

「?・・私を?」

「ビック?」

「うーんとねー。ひょつと付いてきてくれるー?」

「うん、いいけど。」

連れて行かれた場所は、とある洒落た喫茶店だった。

そこの一角落に、少女たちの集まるテーブルがあった。

彼女の友達だろうか？

他にこれと思わしき場所もないので、彼女はそう思った。

「あ。蓮ちゃん」

「へへ」笑顔になると、彼女達に近づいていく。

「あ、風華ちゃん。彼女達はね、私の友達といつかー、ちょっとした仲間といつかー、」

「ちょっとした仲間・・？」

「あー、もうなんだ。」深くは聞かないでおひ。

「彼女たちがね、風華ちゃんを、連れてきて欲しい、って言つから、ついてきてもらつたんだよー」

「ここにちわー」そのうちの少女の一人があいせつする。

それに会わせて他の子達もあことつする。

「えつと、要件って、なんですか？」

「えりとねー、風華さん、つてネットとか詳しいんですねー？」

「え。・・詳しいとか、歴が長いとか、長い分、それなりに、ではあるけれど。」

「つーんとねー、私たち、みんなネットとかやつたことなくてー」  
「まじき珍しいなー。」

「うふ。」

「それで、風華さんに、ちょっと教えてほしいとか、どんなのがいいかとか、導いてほしいなあ～って」

・・・・・

それを聞いた時、ハヤトの一件が頭をよぎった。

「・・・・・」

「？ どうかしました？」

そこで黙した風華を見て、一人が聞いた。

「つーん。・・教えるといつても、ネットとか全く知らない」というか、どんなのがやりたい、とか、ないんですか・・？」

「今、どんなのが人気なんですかー？」

「うーん…ネトゲも相変わらず人気あるけど、今一番新しくて人気なのは、一つのストーリーというかシナリオを、その世界の住人になつて体験するシナリオ体験ゲームかなあ…（私がそれを言つか…）」

・  
ハヤトがあなたのは、私も原因の一端を担つてゐるからなあ…

「へへ、そんのがあるんだー？」

「うん。…でも、それには一つの弊害もあって、シナリオにのめり込み過ぎて、現実生活に支障をきたすケースも、出でてゐる。…」

「

「…・・・」

「あはは・・・へへ・」風華が苦笑いしてみると、

「でも、人気あるんですね？」出でてゐるつてことは、まだ多くはない？？」

「え。…うん。そうだけど、少なからずともリスクがあることは、わかつた上でやらないとね～・・」

「へへ。…でも、面白そづくへ」

よく私の口からこんなセリフが流れ出るものだ。・

私は…

「そのシナリオを体験するゲームって、お勧めのつてありますー？」

「……どんなものもお勧めできる気分ではないのだけれど……

「つーん、取りあえず、今人気のシナリオ体験ゲーム集めたサイトあるから、そこ、教えるね。」

「ひこう逃げ方するのもなんだけど、今お勧めのゲームとか、紹介できる気分じゃない。」

「そうですかあ。……でも、できれば、風華さんのお勧めが、よかつたんだけどなー」

「やつぱぱさう来たか。^ ^ ;

「……えーと、じゃあ、そのサイトみて、何かやりたいのとかあつたら、それについて教えたり、やり方とか教えるので、それで、（勘弁して……）いいですか？」

「はあーい、わかりました♪^ ^ ;

「ふう。

「ちなみに、風華さんは、今どのゲームをプレイされてるんですか？」

「あ～～。お勧めじゃないけど、そのサイトには載つてないんだけど、今テスト期間中のゲームがあるのでそれをやつてます。」

「へへ、やうなんだ」

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・

・・

不意にメロディーが流れる。

空間にウインドウがポップアップする。

「ん？」

「加奈さんからです^ ^」

「かなさん？　。。　ああ、」

「」の間の。

「は？」

キャラかぶつてるか」。

「ほんにちわ～」

「風華さん、この間教えてもらつたゲーム、今みんなでやつてる  
んだけど、これから、またみんなでエコするといなんだけど、風華さ  
んも、こなーい？」

「・・んー、（またハヤトみたいなことにならない、かな・・？）  
別に、構わないけど、・・途中参加でもOK?」

「全然平気だよー、ちよつと意味分からないとこもあるかも、だ  
けど、それまでのありすじみたいのも、プレイできるか」

・やつか。そういえば、やつだったよね。・・

「もうちょっと、時間かかるけど、ちよつとだけ、待つてもらつて  
もいいかな？」

「わかりましたー、じゃあ、みんなこそつこえておへので、待つて  
まーす。」

そう言つて、通信は途絶えた。・・

・・・・・いいの、かな・・？

別に、悪事を働くつもりしてゐる訳じゃないんだし、いい、よね。

・ちょっと、用事を済ませないと。

「彩花さん、」

「はこへへ」

「明日の . . .

・ . . . . .

・ . . . . .

・ . . . .

・ . . . .

・ .

霧が立ち込めていた。

霧の中の森、そこに降り立つた彼女は、どこかファンタジー風の格好をした少女の姿だった。・・

力チ、力チ、力チ、、

時計の音が聞こえる。・・目覚めると、そこはこいつもの部屋だった。

体を起こすと、違和感を感じる。

ああ、・・・うか。今は、女の子の体なんだつた。

ベッドから起き上がった自分は、フリフリの女の子の衣装を着ていた。

このまま寝ちやつたんだ。・・

このボディは機械で出来ててる。

横になつている間は、寝がえりをつたりしないので、そして問題にもならないのだが。

優花、になつてから、もうだいぶ久しく時間が立つ。

だが昔のことを思い出して、ふと気が付くと、ああ、自分は、今女子だったんだ。。

と、思つたりする「」ことがある。

彩花さんもいなくなつた静香な部屋で、一人目覚めて、出かける支度を始める。

A-I用ボディなので、特に朝食を取ることもない。

特にこわみしいとは思わないが、

ただ静かだな、と感じる。

彩花さん、風華ちゃんのところに行つりやつたしな。。

A-I、・・・置おうかな。。？

綾香さんの仕事の手伝いをして、ある程度、お小遣いには余裕があった。

それに、A-Iがあると、何かと便利な側面もあるのだ。

帰つてきたら、ネットで探してみようかな。。

そんなことを考えながら着替えが済むと、玄関へと向かつた。

・・・・・

・・・

今日の仕事場、ちょっとした出張に向かう車の途上で、何処か見覚えのある海辺を通り。

「あ、・・・」薄れかけた記憶が働いて、その場所を思い出すそうとする。

ビテウモイフヒリナの記憶の入ったこのボディになつてからほ、以前の自分の記憶が薄れしていく傾向にある。

なのでその場所を見たときも、その場所だって、思い出すのに時間がかかり、

「ちょっと、車を止めてもらひえるかな・・?」

そう言つたのに時間がかかり、その場所を通り過ぎてからそのセリフを言つていた。

その場所に立つ。

海。・・そこは、海、もちろんそうだが、ありきたりの景色だが、そこから何かを思い出すとする。

思い出そうとするが、記憶がどこへ行ってしまったみたいに、思い出せない。

あれ、・・・何で私、一瞬立とつと思つたんだつけ・・・

後ろを振り返る。そして、先ほぞ出でてきた黒のリムジンのよつな車がさも当然のよつて停まつてゐる。

「・・・・・・・」

その周囲の景色も、「ん?お前、何してゐの?」とでも言わんばかり、(実際にそんなこと言つわけがないが)平然と広がつていた。

「私、いじりで、何しようとしてたんだろ?」

そんな疑問を感じながらも、仕事の時間を思い出し、その車へと歩いていく。

「いじめんね。打ち合わせの場所に、向かつてくれる?」

そう言つと、車は走り出す。

何か心を残すよつと、窓の外に田を向けると、その景色が見えなくなる間際、そこで、誰がが座つてゐるよつな、気がした。・・

「イフリナちゃん」

「はい。?」

綾香さんは、自分のことを「ひ」呼ぶ。

現実世界での名前は、優花、と「ひ」となっているのと、確かに、このボディに設定された記憶とか精神みたいなものは、イフエリナのものだった。

だからイフエリナ、と呼ぶのも分かるのだが、

一応中身は、イフエリナ、ではないのだが。。

「学校、これからも行きつけになるの？」

「え。」

そのままられて、一瞬止まってしまう。

「それは、『ひ』、ことですか？」

「え？ とね。仕事、本格的に手伝つてみる気、ない？」

薄々その「ひ」を「ひ」とは言わぬ感じでいた。

だから、つこに言われたか、といつ部分と、ホントに自分でいいのかな、と思つてひががあり、

返す言葉に詰まつた。

「イフヒリナちゃんが仕事手伝ってくれれば、すぐ助かるし、もちろん、十分生活していけるだけの、お給料はだすよ？」

「……」

「どうかな？」

その時、優花の中には、学校のことが浮かんでいた。

何故だが理由は分からなかつたが、あれをやめちゃつていいのかな？つて思いが、頭にあつた。

でも、特にやめて差し支えあるトコトコ理由があるトコモ想えなかつた。

「なんでだひり？ あそこ、・・・何か、あつたっけ・・？」

「イフヒリナちゃん。・・？」

「あ。はい。」

「何か、問題でもあるのかな。？」

「うーん、特に、ないですが。」

「うーん、何か、忘れてる、気が・・

「まあ、こますぐ、決めてもらわなくってもこいよ？」

「あ。はい。少しだけ、考えさせてもらつて、いいですか？」

「うふ。待ってるね^ ^」

そういうて、打ち合わせの後の時間は、終了した。

・学校、行つてみよう、かな。。

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・

久しぶりに、学校にやつてきた。

比較的校則の緩い学校で、綾香さんの仕事を手伝つてゐる、と事情を話したら、仕事の都合で学校を休むことを、了承してくれた。

特に何もない。・・箒の学校。

友達も何人かいたが、別に、学校をやめても、問題ないようになと思えた。

学校でしか会えない訳じやないし。

でも、何かが、引っかかっている。何か肝心なことを、忘れているような。

秋にしては暖かい日和のなか、ザツと何か足音が聞こえた。

「・・・？」

振り返ると、振り返った優花に向けて、あ。という表情を浮かべて、一人の少女が立っていた。

「優花・・・」

「・・・？」一瞬、誰なのか、見覚えがあるような気がしたが、わからなかつた。

その反応を見て、少女が何かに気づいたような表情を見せる。

「・・・もしかして、私のこと、覚えて、ない？」

「・・・あ、・・・風華・・・さん？」

「・・・」「・・・覚えて、ないんだ・・・？」

「あ。あの。・・・」めんなさい。

「うーん・・・」と考え込む少女。

「あ。あの~。」

「ちょっと、来て。」

そう言つと、風華は、優花の手をつかみ、どこかへ向かつて、歩き始めた。

「私なりに、ちょっと調べてみる。」

風華はさつまつと、優花をなにやら装置に繋いで、コンピュータのモニタを幾つか開かせた。

「風華さん、なに、するの、かな……？」

優花が心配になつて聞いた。

「優花……あなた、記憶を失つてしるでしょ？」

「え、ええと……そう、なの……？」

「うん。だつて、私のこと、忘れてるでしょ？」

「……？」

「……」変わり果てた、と言つては言つては過ぎか、、、その優花を見て、風華は考え深げに沈黙する。。

「彩花さん、」

「はいへへ」

「優花の内部データ、全部モニタに表示してくれる？・・できれば、  
だけど。」

「はいへへやつてみますね。」

彩花が専用のイスに腰かけて、軽く手をつむると、パソコンモニタの複数のモニタに向やうり様々データが田まぐれしへ表示され始める。

それを険しげな眼差しで眺めている風華。。

彩花が薄く眼を開く。。

「やつぱり、プロテクトが掛かってるみたいですね。。」

「・・・解ける？」風華は慎重に聞いた。

「できないこともないでしょうけど、・・・大丈夫ですか・・・下手に解くと、データが送信される可能性がありますよ？？」

「・・・やつぱり、そうなる、か。・・・」

「たぶん、だけど、・・・何かしらの干渉が仕掛けられると、思うんだよね。？」

「・・・記憶が抑制されてる可能性があります、ね。」

「うん。 そうでなければ、優花が・・・、ハヤトであった頃の記憶、なぜ、忘れてるの、かな。？」

「・・・うーん・・・、男であつた頃の記憶、優花さんことって、もういらない、か、何かいやな思い出として、認識されているの、か。」

「うん。 その可能性もある。。。」

「あのー・・・

「ん?」

話に夢中になつていて、優花の存在をすっかり忘れていた。・・い  
や、優花の話をしたいたが、そこにいるのを忘れていた。

「何の話かわからませんが、・・私、何も、忘れて、ませんよ・・  
いや、忘れるんだよ。」これは重傷かも・・?「私、・・あなた  
の友達だったんだよ。」

「・・・・

「やつぱつ、忘れてるんだね・・?」

「確かに、何か忘れてる、といつ感じはありましたが・・

優花は思つ。・ただの、・クラスメートじや・・?

風華は思つ。

ハヤトは寝ている。だとすれば、ハヤトがこうして優花として過ご  
していくのは、なんらかの経路で優花のボディにアクセスしている  
と考えることができる。

だとすると、プロジェクトを解こうとしたら、その情報がその経路を  
通して何処かへ送信される可能性がある。

彩花さんも、そのことを言っていた。

風華は表示されたデータを一通り眺める。。

やはり、肝心な部分はプロジェクトが掛けられている。  
優花の記憶が操作されているような節は、今のデータからどうか  
がえなかつた。

男であつたころの記憶を切り封印した・・・？

優花にとつて、そんなに辛い記憶だったのだろうか・・・？

特に辛い現実を抱えている風は見てとれなかつたが・・・

とはいへ、風華はそんなに深く、ハヤトのことを知っていたわけではない。

そもそも、ハヤトに女のおすべく、ゲームに誘つたのは風華なのだ。

それ以前から、ハヤトにそつこつた願望があつたとすれば・・・

フリフリの衣装を着た、女の子になつてた優花を見やる。

・やうなの？ハヤト・・・いや、優花・・・

「優花・・・

」？「顔に疑問符を浮かべる少女。

「ホント……思って任せない?」

「……」

「私のこと。思ってさせない?」

「……」

「よく、海で会ったよね。?」

「……」

「思い出せ、ない?」

「……海、です、か?」

「そのとおり、優花の中に、何か引っかかるものがあった。」

風華の中には、確証はないが、何か、勘のよつなものがあった。・

優花は、記憶を抑制されている、といつ・・・単に、思って出したくない記憶、とかそういうことではない。

やつこいつ確信にも似た感覚があった。

「うふ。やつだよ。優花。海で、よく、会った。」

「……海……。『みんなさよ。思ってさせない。』

「うふ。いいよ。」

「なにか、、思い出しちつなんですが、思い出せない・・・」

「そつか。へへへ 大丈夫、だよ。」

「彩花さん。」

「はい。」

風華の中には考えがあつた。

「データ、分析してくれる?」

「わかりました。」

「?」

ひとり、優花がハテナマークを浮かべる。

「優花さん、ここであつたこと、誰にも言わないでもらえる、かな。  
・?  
・?」

風華は、さつき優花に質問したとき、読みだされたデータの記録をしておいたのだった。

「勝手にボディとか調べたとか、誰にも知られたくないんだよ。」

「

「・・・・」優花は少し黙り込むと、

「うん。わかった。誰にも、言わないね？」

そう言って、笑った。

「私のこと、心配してくれたんだもんね・・・

きつとい、彼女は、ホントに私の、友達だったんだ。」

だから、「風華さん。・・・ありがと。」と、そう言った。

「へへ」風華は、笑顔で返すと、

彼女の装置を外し、そして、彼女を見送った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5674d/>

---

Realize Network

2010年10月8日13時00分発行